令和三年度入学者選抜学力検査問題

（前期日程）

国　語

（注　意）

1　問題紙は指示があるまで開いてはいけません。

2　問題紙は本文一〇ページです。答案用紙は三枚あります。

3　答えはすべて答案用紙の指定のところに記入しなさい。

4　字数制限のある解答欄への記入に際しては、句読点を一字と数えなさい。

5　問題紙と下書き用紙は持ち帰ってください。

一　次の文章は、日本の植民地支配下にあった朝鮮半島で、現地出身の少女と、父の仕事の都合で移住して来た日本人の少年とが知り合い交流する物語の一節です。これを読んで問いに答えなさい。

龍二の一家は前の年のしゃくやくの花が咲く頃この土地へ移住して来た。四国の果ての海辺の故郷の町で製缶工場を馘になった父親は、はるばる朝鮮に単身職を求めにやって来て、その頃としては職工生活などよりはずっと割のいい総督府(注1)巡査の口にありついた。月給はともかくとして、五割の植民地手当は有難いものだと母親に手紙をよこしたのを龍二は聞いたことがあった。丁度世界大戦が終って間もないころで、朝鮮では憲兵制度が巡査に置きかえられ始め、物情(1)ソウゼンとした世相なので、巡査が大増員されて待遇もよかった。内地にいれば判任官(注2)四給俸の月収だなどと云って来たと母親がおばあさんに誇り顔に話し、一家中が父親の出世を喜んで団欒は賑かに楽しかった、そして間もなく父親は李根宅子爵邸(注3)の請願巡査(注4)も兼ねて、邸内の広大な朝鮮家屋をあてがわれ、その上「請願」の手当もはいったので出来のいい龍二を中学校にやることもできる――と云う便りが来てからは、中学も遠い郡庁所在地まで行かねばならないようなこの町では、父親の出世が大変な出世のようにもてはやされ、龍二の学校友達のやんちゃたちは「中学校に行けるんじゃとな」と羨ましがった。

しあわせに色めき立っていた一家も、いざ母親のおしゅんと龍二が朝鮮へ渡るとなると、急に不安になり、併合の前後から長く続いた暴動のことなどを聞かされたりして、「気の荒い外つ国」に渡る子供や孫を心細がり、武士の家に生まれたおばあさんは、「万一の時の用意にな」と懐剣を先祖の位牌の前でおしゅんに渡したり、愈々発つ日は一家水盃(注5)、泣きの涙で別れのエン(2)を張ったりしたものである。ずーっと後になって、母親は龍二と市の日に朝鮮人市場に買い物に行き、魚を縄で下げたりしての帰り道、

「こんな、のんきな結構な朝鮮へ来るのに水盃をしたりしたのじゃけにな」

などと、その頃の仰山な悲しみようを笑って語ったりしたものであった。そして船のボーがなり、ガンペキ(3)に立って手を振っているおじいさんやおばあさんや親類の者たちの顔がかすみ、八幡様の大鳥居がだんだんちっちゃくなって行くと、母親は懐の短

刀に手を入れたりしながら、

「八幡様の鳥居も見えんようになった。何時になったら龍二と一緒に帰って来れるじゃろう、一生見んで朝鮮で暴徒に怨まれて殺されるかもわからんが」

などと、眼に涙をためながら、子供の龍二にさえ語らずにはおれないで心細がるのであった。

けれども龍二は、まるで反対に勇壮活潑な気持ちがし、

「わしはなあ、総督になるんじゃけん、そないなこと心配しなさんなや、総督は朝鮮の王様みたいなものじゃけん、暴徒なんぞすぐ退治してしまうがな」

と一人で力みかえり、未だ見ぬ朝鮮の山河に楽しい想いを走せるのであった。

ついその前まで、龍二は学校中で有名な陸軍大将志望であった。ところが朝鮮に渡るとなると、朝鮮を征服した豊臣秀吉みたいな英雄になりたいと思った。その心にはずみをつけるように、源五兵衛というおじいさんみたいな名を持った村長の子のやんちゃが、

「朝鮮ではな、総督が一番偉いんじゃそうな、総督になれや、総督になれや。龍ちゃんならできがいいからなれるとお父ちゃんが云っとった」

と励ましたので、龍二は簡単に忽ち熱心な総督信者になり、別れる前の日はその源五兵衛というやんちゃと浜の飴湯(注6)で乾盃をやって、「なれや」「なる」と誓ったものであった。そして朝鮮に渡ったら、朝鮮の子供たちを可愛がり、手なずけて皆にあがめられ、A やがて総督になって栄耀栄華をつくすのだと龍二の望みは大きくふくらんで行くのであった。

〔中略。龍二は現地の少女、カンナニと出会う。〕

龍二とカンナニはすぐ仲善くなった。

翌朝、龍二が制服姿の父親を送って出る途中、龍二の家の小門の前からカンナニが家の中を覗いているのを認めた。龍二たちが門の傍らまで行くと、カンナニはツーッと門の扉の蔭に身体を隠すのである。龍二は楼門の前で父親と別れ、父親が手を振って小路に姿を消すのを見届けると、「あの女の子帰ったかな」と期待を抱きながら小門をくぐった。

すると今度は龍二の家の中の扉の蔭にカンナニを見出した。女の子は恥かしそうに瞳をあちこちに廻転させ、やがて手持ち無沙汰の手で上衣の帯紐を口に当てた。すると帯紐がよれよれになっているのに気がついて、恥かしさに硬ばった腕を弓なりにそらして帯紐の皺をのばし始めた。

龍二はあの昨日の勝気な姿とうって変って、内気でしおらしいカンナニの態度に驚きの眼を瞠るのだ。

「カンナニ」

そう云って龍二はニーッと笑って見せた。すると女の子も右のかたえくぼをポコンとへこませて笑い返した。

「遊ばんかいや、裏の庭に行って」

と云いながら、龍二は杏やユスラの小灌木が茂っている裏庭に先に立って歩き出した。

カンナニは黙ったままついて来た。大銀杏の長くのびた木の根に腰を降ろすと、カンナニも向い側に右足を敷き左足を立膝にして坐った。何と話しかけていいかわからなかった。すると、カンナニが、

「お前巡査の子な」

と云った。

「何じゃなあ――」

カンナニはもう一度、「お前巡査の子な」と独りでうなずきながら暗い顔をした。そして、不審気な龍二の顔に、今度は日本語で、

「『巡査の子と遊んじゃいかん』父が云ったよ」

「どうしていけんのじゃ」

「父は日本人大嫌い、憲兵一番嫌い、巡査、その次に嫌い。朝鮮人をいじめるから、悪いことするから――」

「巡査は悪いことはせん、巡査は悪いことをしたり、いじめたりする奴を退治する役じゃ。うちのとうちゃんも云っとった。朝鮮人はいじめちゃいかん云っとった。日本人は悪いことはせんのじゃ、天皇陛下が治めていなさるから、伊勢の大神様が見ていなさるから……」

龍二はいっしょうけんめいにカンナニを説得しようとした。けれども女の子は淋し気に笑ったまま乗って来ようとはしなかった。

私の家でも――とカンナニは云うのである――家をツブ(4)された。持っていた田畑はいつの間にか新しい地主のものとなっていた。そんなはずはないから刈り入れをしていたら、巡査がやって来て父をろうやに入れ、父がやっていた書堂(注7)は、悪いことを子供等に教えるからと戸を釘づけにしてしまい、子供たちを無理やりに普通学校に入れてしまった。それで父は昔出入りしていた李根宅に頼んで門番にしてもらってやっと暮している。――

ふと、カンナニは立ちあがってホウセンカの叢にしゃがんだ。風もないのにホウセンカの花は一ひら、二ひら散っていた。散りしいたホウセンカの花が茎の根っこを赤く染めている。その落花をカンナニは掬いあげて、掌でもみくちゃにした。赤い汁が血のように掌からこぼれ出た。その汁をカンナニは小指の先につけてコスっていた。小指から薬指、中指、人差し指と、指もツマサキ(5)も真赤に染まった。

「どうしてそないに、手を血だらけにするのかな」

「あーら」

カンナニは、晴れやかに笑って見せて――

「かわくといい色になるよ。朝鮮の女の子は皆、こうするよ」

そう云って指の部分の赤い汁を袴で拭い、紺の地に赤いシミを沢山こしらえた。

「ね――日本人は皆嫌い、巡査は大嫌い、それでもお前は大好き」

カンナニは龍二の顔を両手ではさんでのぞき込むようにして――

「タンシンはお前のことよ。朝鮮語おぼえなさい。わたくしが日本語話せるように。ね、そしたらお前と私は朝鮮語と日本語と交ぜこじゃで話できるね。学校の話や、そのほか、いろんな世界中の話、たくさあーんしよう」

そこで龍二は[D]朝鮮語を習い、カンナニと仲善くすることを誓うために、カンナニの「指切り」の小指に自分の小指をはさむのだ。

（湯浅克衛「カンナニ」『コレクション　戦争と文学17』集英社、二〇一二、二五三～二六三ページ、一部改変の上、引用、初出は一九三五年）

（注1）総督府は一九一〇年の韓国併合より、日本政府が朝鮮半島に置いた統治のための最高機関である朝鮮総督府のこと。重要なポストは日本人が独占していた。その長が総督で、陸海軍大将が歴任した。

（注2）明治憲法下の国家公務員の官等の一つで、高等官の下に位置付けられる。

（注3）韓国併合に協力するなどの「功績」や門地がある者に対して、日本の華族制度に準じた爵位が日本によって与えられ、世襲財産の設定など特権が認められた。子爵は爵位のひとつ。

（注4）銀行や会社などが、その費用を出すことを条件として巡査を護衛のために置く制度、またそれにもとづいて任命された巡査。

（注5）二度と会えないかもしれない別れに際して、酒ではなく水を酌み交わして飲むこと。

（注6）水あめや麦芽糖を湯に溶かした飲み物。

（注7）初等教育相当の私塾。総督府は書堂を閉鎖させる一方、日本人向けの小学校とは異なる「普通学校」を設け、日本語を「国語」とする教育が行われた。一方で教育の普及には消極的で、最後まで義務教育制度は施行されなかった。また本作品が最初に発表された一九三五年には民間の朝鮮語講習会に中止命令が出された。

〔問一〕 傍線部(1)～(5)の片仮名を漢字に直しなさい。

〔問二〕 傍線部B「淋し気に笑った」について、なぜ笑うにもかかわらず「淋し気」なのか、本文の記述を踏まえてその理由を一〇〇字以上、一五〇字以内で述べなさい。

〔問三〕 左の文章は傍線部C「晴れやかに笑って見せて」について、そのような表情をしたカンナニの心情を解説したものです。括弧内に当てはまる適切な語を、それぞれ漢字二字で記しなさい。

これまで龍二は自分と仲良くしてはいたが、自分たち朝鮮半島の人間がどんな暮らしをしているかについては知らないようだった。しかし、ホウセンカの汁で指を赤くすることに龍二が疑問を示したことで、龍二が自分たちの生活や（ ア ）に（ イ ）を持ち、自分たちのことをよく（ ウ ）してくれる機会を得たように思ったから。

〔問四〕 朝鮮半島に渡る前には傍線部A「やがて総督になって栄耀栄華をつくす」と思っていた龍二は、傍線部D「朝鮮語を習い、カンナニと仲善くすることを誓う」ようになりました。龍二にどのような変化が起こったのか、本文の記述を踏まえて述べなさい。

二　次の文章は、四条宮寛子のもとに出仕していた女房の下野が、賀茂社に参詣したときのことを語ったものです。これを読んで、後の問いに答えなさい。

賀茂に詣でたりしに、雪のいみじう降りしかば、車宿りに引き入れて見れば、もの古りたる木ども皆白みわたりたるに、見やれば、鳥居の方にいとことごとしうて、頼家が詣づるに、供なるあやしげなる下衆して、『このわたりに住む尼の申す』とて、言ひかけて来[A]」とて遣る、

老い木にも花は咲きけり[B]ちはやふる雪にぞ見ゆる神のしるしは

帰り参りて四五日ありて、大殿の、御前に語り申させ給ふ、「頼家が語り候ふ、『賀茂に一日参りて、いとをかしきことこそ候ひしか』」とて、歌を申させ給ふ[C]、をかしと聞きて居たり。「『これ、誰と言ふことといかで知らむ[D]』と嘆き候ふ」など申させ給ふを、「歌はいかが言ふ」と申させ給へば[E]、「それを褒め候ふ」と申させ給へば、「このわたりにあらば」と仰せらるれば「我か我か」とて、告げさせ給へりければ、返り事ありき。

（『四条宮下野集』による）

（注）
○車宿り――牛車を一時的にとめておくための建物。
○頼家――頼通家の家司。和歌六人党のひとり。
○大殿――藤原頼通。皇后寛子の父。
○御前――後冷泉天皇の皇后。四条宮寛子。

〔問一〕 傍線部A「来」の漢字の読みを答えなさい。

〔問二〕 傍線部B「花は咲きけり」はどのような状況を詠んだものか、もっとも適切な箇所を本文中から二〇字以内で抜き出しなさい。

〔問三〕 傍線部D「これ、誰と言ふことといかで知らむ」について、「これ」の内容を明示しつつ現代語訳しなさい。

〔問四〕 傍線部C・Eの動作主を、本文中から抜き出して答えなさい。なお、動作主が『四条宮下野集』の作者である場合には、解答欄に「作者」と記入すること。

三　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい（設問の都合で送り仮名を省いたところがあります）。

太宗ノ時親試ミニ進士ヲ、毎ニ以テ先ニ進ムル巻子ヲ者ヲ上ニ賜フ第一人ノ及第ヲ。孫何ト与ハ李庶幾ト同ジク在リ科場ニ、皆有リ時名。庶幾ハ文ノ思敏速ナルモ、何ハ尤モ苦シム思遅キニ。会言事者ノ上ニ言フ、「挙子軽薄ナリ、為ルニ文ヲ不レ求メ義理ヲ、A惟以テ敏速ナルヲ相誇ルノミト。」因リテ言フ、「庶幾ハ与ニ挙子ニ於イテ餅肆ニ中ニ作リ賦ヲ、B以テ一餅ノ熟スルニ成ス一韻ヲ者ヲ上ト為ス勝ト。」太宗聞キテ之ヲ大ニ怒リ、是ノ歳殿試、庶幾最モ先ニ進ムルモ巻子ヲ、遽ニハカニシテ叱出スレ之ヲ。b由レ是ニ何ル為ニ第一ト。

（宋・欧陽修『帰田録』による）

（注）
○太宗――北宋の第二代皇帝、趙光義。
○巻子――試験の答案。
○孫何――北宋の政治家。
○李庶幾――北宋の文人。
○科場――科挙の試験が行われる場所。

○言事者――皇帝を諫める官。
○挙子――受験生。
○義理――物事の正しい筋道。道理。
○餅肆――蒸し餅を売る店。「餅」は小麦粉をこね平たくした食品。
○作賦――詩を作ること。
○一韻――韻を踏んでいる一篇の詩。一首。
○殿試――皇帝が自ら立ち会い、宮中で行われる最終試験。これによって進士合格者の順位が決定し、首席合格者は「状元」とよばれた。

〔問一〕 傍線部A「時名」の「時」と同じ意味で用いられていない「時」を含む熟語を次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 時流　　イ 時価　　ウ 時局　　エ 時雨

〔問二〕 傍線部a「惟」、傍線部b「由」について、送り仮名を含む読み方を平仮名で答えなさい。

〔問三〕 傍線部B「以一餅熟成一韻者為勝」とはどういうことか、本文の内容を踏まえて説明しなさい。

〔問四〕 この年、孫何が殿試で首席合格できた理由を七十字以内で答えなさい。